

序

神戸女学院は本年十月十二日に創立九十周年を迎えたが、その記念論文集が大学から出版されることは誠に悦ばしいことである。

明治二十三年京阪神地方にある基督教主義各女学校が集り協議の結果、カレッジの設置を希望する声高く、神戸女学院の前身、神戸英和女学校が興望を負うて当時の高等科をカレッジの課程とすることになり、第一回のカレッジの卒業証書を授与したのは明治二十五年、従って日本のプロテスタント基督教主義学校の中では最古の女子専門程度の学園である。更に未だ女子のための大学令が公布されなかった大正八年、大学部を設置することが認可され、高等女学校の上に高等部三年、大学部三年、計六年の課程をもち、実質的には大学程度の授業が行われるようになったのである。

このように絶えず女子最高の教育機関を目指した神戸女学院が大戦後女子大学令の公布と共にいち早く国立大学にさきがけ昭和二十三年、東京以外では唯一の新制度の四年制の女子大学として発足し得たことも、また、今春四月、更に西日本の女子大学では始めての文学研究科（英文学専攻、社会学専攻）の大学院設置が認可された事も至極当然である。ただその真価がどれだけ誇り得るものであるか、ここに問題があると思う。

英国の作家、ヴァージニア・ウルフは学究一途に生きる哲学教授にこんな事を言わせている。「十億の人

々の中で何人が結局はZに到達するのであろうか。自分はQに到達した。英国中でQに到達する人も極く少い。しかしQの次は何か、いくつもの文字がつづき、その最後は人間の目には殆んど見えないで遙か彼方で赤くかすかに明滅している——Zは一世代に一回たった一人の男が到達することが出来るのだ。自分はQに到達したが、それだけでも有難いことだ。」と。

わが学院の精神的目標は人類最高といえる「愛神愛隣」であり、到底人間わざでは完全に達することの困難な高い理想であるが私共は日々これに向って挑戦し苦闘している。それと同じように、私共の智的目標も人間の目に見え難いZを目指して絶えず精進努力することに意義があるのではなからうか。

この論文集が、どうか各教授の日々の地道な研鑽の積重ねであり、且つまた、Qに達し得るものともなれば、それは大学のアカデミックな面を昂揚し学院の歴史にその一頁を飾ることが出来ると思う。私はこの論文集がぜひこうした意義と誇りを持つものであることを切に祈ってやまない。

昭和四十年十一月

大学長 丹部 トモ